

活字メディアに対する映像メディアの影響

大 里 巖

Printed Mass Information Media Under the Influence of Growing up Image Media

Iwao OSATO

Abstract

In the 1960s it was presumed by many people that the widely- spreading televisions would have negative influences on printed media in the field of mass information. This prediction now has been realized only partially: Negative influences of TV on printed media can not be seen in quantitative relations. The circulation of books, newspapers and other printed media, on the contrary, show upward tendencies. In qualitative relations, however, a distinct affect of TV on printed media can be observed—namely, “image-orientated” printed materials.

Printed media itself heretofore has been proved to be existent whatever the case, may be, though accompanied by some qualitative changes. As for the so called “Less read” tendency of the people, however, it is regarded as a pessimistic symptom of the traditional part of the world of information transfer.

In this work shall be given discussions on the actual situation of the said “Less read” tendency and possible countermeasures to meet such a social symptom.

1. 予想された映像メディアの脅威と現実的展開

現実に生起する現象であれ、映画のようにフィクションとして人為的に製作された題材であれ、動く映像として直接に受け手に伝達される視聴覚メディアたるテレビが、1960年代までに世界の主要諸国に普及する過程で、活字メディアの存続の可能性に極めて大きな脅威の念を引き起こしたことは、よく知られた事実である。世の中に生起するあらゆる出来事や催し物が、茶の間でスイッチを入れさえすれば視聴できる魅力もさることながら、視聴覚に同時に訴えるという、活字メディアにはない優れた伝達能力の故に、活字メディアのコミュニケーション機能を代替してしまうのではないかという懸念が、その最たる理由であった。活字メディアの関係者は、その存続そのものを本気で危ぶんだものだが、結果はどうであったろうか。

日本でテレビの本放送が始まったのは1953年であり、1960年代にテレビ所有率が急増してゆ

き、1967年に一世帯の白黒テレビの所有率は96%に達している。この状況の中で活字メディアがどのような運命をたどったのかを概観してみよう。

NHKの調査機関が1960年から5年ごとに実施している「国民生活時間調査」から、興味深い事実が明らかになる。この調査では一日平均のメディア接触時間が示されているが、メディアは活字（新聞・雑誌・本）、ラジオ、テレビの3種に分けられており、ラジオとテレビの関係を見ると、1960年にはラジオが約1時間半でテレビが約1時間であったものが、1965年には逆転してラジオ約30分、テレビ約3時間となっている。この接触時間の割合はその後ほぼ一貫しており、ラジオが60年から65年の間に同じ電波メディアのテレビの台頭を許したものの、その後は低下したとはいえ、メディアとしての独自性と存在意義を一定に保っているという様子が窺える。

これに対し活字メディアの場合は、テレビの登場にもかかわらず、予想に反し、60年の調査から現在まで一日平均約30分という一定した接触時間を保持しており、この数値を見る限り、活字メディアの映像メディア、端的にはテレビの進出による衰微は現実には生じなかったことになる。

これを裏づけるデータとしては、やや異った視点になるが、出版物の発行部数という数値がある。一般日刊新聞の総発行部数は1965年が2,978万部、1975年が4,051万部、1985年が4,823万部で、この間の各年度の発行部数を見ても20年間でトレンドとしては増えつつある。雑誌、書籍の場合にも同様の傾向が見られるが、雑誌の総発行部数は1965年が12億4,496万部、1975年が23億4,672万部、1985年が40億1,230万部であり、書籍は1965年が1億4,238万部、75年が2億2,727万部、85年が3億1,221万部という結果になっており、発行部数という観点から見ても活字メディアは隆盛こそ示せ、衰微の兆候はない。

しかし書籍に関しては、毎日新聞社の行っている「読書世論調査」の結果がやや先に述べた活字メディアの凋落という悲観的予測に部分的な証左を与えていると言えるかもしれない。この調査では、様々なメディアの各々に接触しているか否かを聞く項目があるが、書籍を読むかという質問に、「読む」と答えたサンプルの割合、すなわち「書籍読書率」は、調査を開始した1949年から1955年まで毎年増加し、1956年以降現在までは毎年45%前後と一定している。しかしサンプルのうち16才から19才の青少年層の「書籍読書率」を見ると、1979年までは常に60%以上であったのが、1980年以降1987年まではほぼ50%前後に落ちこんでいるのである（毎日新聞・87年度調査報告記事）。しかし10年ぶりに実施された総理府の「読書・公共図書館に関する世論調査」の結果では、この一年間に本を読んだと答えた人は69.1%で、10年前より8.6%増えている。これに対し15才から19才までの青少年層の読書率は、前回は88.0%、今回は87.4%と変わりが無い。

質問設定が多少違うし、本を読むか否かは主観的な回答で、非常に不確実性がともなっている場合もある。エスカルピトなどは、読書行動についてアンケートの回答者から正しい答えを得ることは、キンゼイ報告でまじめな回答を得るよりもむずかしいと言っているほどである。

したがってここに引用した統計的数値によれば、活字メディアの受け手の需要は現在までのところ依然として根強いものがあると判断してよいだろう。他方青少年層の書籍読書率の低下の兆しは、今後の社会を担う世代であるだけに不安材料とはなる。しかし青少年層の活字との関わりは別の観点からも吟味をする必要がある。その観点とは、映像メディアが活字メディアの質に与えた影響である。

2. 活字メディアの映像化

前節で述べた通り、活字メディアの量的存続に対する映像メディアの影響は、少なくとも現在までのところ否定的なものではなかったといえる。しかし活字メディアの形態、表現方法等の内容面への影響ということになると、映像メディアの影響はかなり大きいのではないだろうか。それを象徴する表現が「活字メディアの映像化」である。

たとえば広瀬は活字メディアの映像化を次のように分析する(「映像化する活字メディア」『テレビ大学講座 マス・コミュニケーション論』)。

(1) 従来からみられた映像化の量的な拡大、浸透

- ① マンガや写真集のような映像出版物の増大
- ② 図解、イラスト、挿絵、写真など、文字と並存している映像部分の拡大

(2) 従来はみられなかった新しい形の映像化

- ③ 誌面のレイアウト・構成自体の映像化
- ④ 従来、文字の世界とみなされていた観念や思想などの論理内容の映像化

この中で①、②は自明ともいえる事実だが、③については、写真、絵、文字などが一体となってモザイク的な構成になっていると説明され、活字が含まれていても全体としては映像的な図柄になっていることが指摘されている。④は文字表現のジャンルであったものが、映像によって表現されている傾向の指摘であり、ストーリー性の強い劇画等が例としてあげられている。

広瀬は活字メディアの映像化がテレビの浸透とかなり深い関係にあることを示唆しているが、それを理解するには活字メディアと映像メディアの表現の対照性、認識構造の差異に言及しなければならない。活字メディアは現象を過程的に分析して表現しようとする。文字に置き換えるためには現象を因果関係にしたがって論理的に表現しなければならない。表現された内容は意味が明確であり、かつ一義的に解釈できる。しかも原因や連関の探究のかなり複雑な思考回路も表現可能である。これに対し、映像メディアは生起する現象をそのままに写しとって

表現することが可能であり、因果関係にしたがって分析的な作業を行う必要がない。そのかわりに表現された現象は論理的に把握するよりも感覚的に認識されやすく、多義的な解釈を許容する。しかし現象の背後関係を論理的に表現することには限界がある。

このように両メディアが対照的な表現特性を有するのであるから、活字メディアが映像メディアに近づくということは、ある意味では革命的な変質である。それにもかかわらずテレビという映像メディアに親近感をもつ受け手の認識能力や認識傾向が益々映像向きに馴化されてゆくならば、活字メディアが生きのびるためには、自らの表現を映像メディアに歩み寄ったものにしてゆかなければならない。つまり、テレビ的知覚が支配的になれば、受け手が活字メディアをも視覚的、感性的に認識することを求めるのは当然の理であり、文字表現そのものの映像化に行きつくはずである。

こうした推論を裏づける事実出版物の内容であろう。前節で引用した統計も示しているように、たしかに書籍・雑誌の発行部数は増えているが、その内容ということになると一昔前とは様変わりしている。書店に並ぶ出版物を見ても一目瞭然なのだが、変化を要約すれば、

教養的なものから→娯楽的なものへ

難解なものから→安直なものへ

ということになる（前出、『マス・コミュニケーション論Ⅱ』の「出版と大衆文化」参照）。

気安く読めて娯楽性のある出版物への需要は、たしかにテレビだけの影響ではなく、スケジュール化されてストレスの強い社会での瞬時の息抜きといった必要にも結びつくが、感覚的、受動的なメディア接触という点ではテレビ視聴に共通する。ともかくテレビは他の要因と連動したにせよ、活字メディアを映像化し、ハンディーな、視覚的、受動的な内容に変えていったという点では、活字メディアに対し、無視できぬ影響を及ぼしていると考えて差しつかえあるまい。

3. テレビに対する新聞の対応

アクチュアルなニュース報道についても、テレビは優れた機能を発揮する故、活字メディアの中でも新聞側の反応には、はじめから切実性があった。広瀬は現代大衆新聞の特徴として、①言論性の潜在化、②解説性の増大、③ニュースの読み物化、④ニュースの芸能化をあげているが（前掲書「新聞の変質」）、「解説性の増大」と「ニュースの芸能化」については、テレビの明確な影響を認めている。

解説性が増大した理由としては、テレビの技術的特性に基づく速報性に、新聞は太刀打ちできず、むしろテレビの速報したニュースを詳しく報じたり、その内容を解説することに独自の機能を見い出したためとする。またニュースの芸能化はテレビで醸成されたレポーター・ジ

ジャーナリズムが新聞にも及んだ結果とみる。以上の指摘からも窺えるように、現代の大衆新聞を特徴づける様々な要因が、大衆社会の進展の中で生じてきたものであることは否めないとしても、テレビの影響も決して小さなものではないことが理解できる。

結果として表われた事実に照らすまでもなく、テレビの普及してゆく過程で、新聞関係者には、新聞の存続のためには、紙面内容の変質を図ってゆかなければならないとの強い認識もあった。たとえばノエレ・ノイマンは70年代に西ドイツの様々な新聞社の社主と編集長に、テレビの台頭に対処した新聞の紙面作りについてアンケートを行っているが、興味深い結果が得られている (Noelle-Neuman, 1986)。

新聞社の社主と編集者のテレビに対する対処の仕方は二つの考え方に代表される。

- ① 新聞はできるだけテレビに接近すべきであり、場合によっては模倣せねばならない。テレビを視聴し慣れた受け手のことを考えるならば、ニュース報道は短く、分かりやすく、際立たせねばならず、印刷上のレイアウトもカラフルで派手にしなければいけない。
- ② 新聞はテレビに対し、補完的な機能を発揮しなければならない。出来事の背景を入念に調査し、解説を加えることが重要であり、客観的に全体的な展望を提供する必要がある。

補完性を強調する第2の意見によれば、新聞はテレビができないことをなすべきであり、論説や社説、解説記事等に力点を置くことになる。サンプルとなった新聞社のうち、大新聞や発行部数を伸ばした新聞の社長や編集長には、第2の考え方をとるものが多かったということは注目すべき点であろう。

たしかに活字の解読は単に文字を読むだけではなく、シンボル化された意味を読み手の想像の中で解明してゆかなければならない。テレビであれば、自然環境を知覚する場合と同様に、対象を直接に把握でき、この点からテレビのメディアとしての長所と短所が生じてくる。たとえばノエレ・ノイマンは次のような長所と短所をあげる。

〈テレビの長所〉

- ・視聴者に、自分が出来事を目撃者であるという印象を与える。(しばしばそれは錯覚ではあるのだが)
- ・第1の長所に関連して、テレビの信憑性が強まる。
- ・視聴者に、強烈で、感情に訴えた、忘れがたい印象を与える。
- ・コミュニケーションの手軽さと、視聴者が感ずる動きの豊かさにともなって、テレビには優れた娯楽性が生まれる。

〈テレビの短所〉

- ・視聴者は自分のプランに関係なく、放送時間に合わせて視聴せねばならない。(ただしビデオによってこの欠点は補える一筆者の付言)

- ・知覚の速度を自分のテンポに合わせて調節することができず、メディア任せである。
- ・視聴者の理解能力や予備知識に関係なく、視聴しなければならないので、内容に理解できない個所が生ずる。

このようなテレビのメディア特性のゆえに、事柄の連関、相互作用、推論、対極的な考え方を伝達することは、テレビの苦手とするところで、視聴者は事態を十分に把握できない場合があり、もう一度ゆっくりと、完全な形で報道された内容を知りたいという欲求を抱く。この点に関して新聞はまさに本来の機能を発揮することになる。

その上テレビの報道部門のメディア容量も時間的に限定されているため、テレビは重要なニュースだけを選択し、しかも個々のニュースは短く簡潔な形で提供される。その点新聞は出来事のニュース・ヴァリューにしたがって、必要ならば十分なスペースを使って報道できるし、解説や論説も詳細に加えることができる。さらにテレビでは採り上げられない、やや重要性の低いニュースやローカル・ニュースも拾い上げてゆくことができる。

このように理論的にもテレビと新聞の相補性が確認されると、大新聞や部数を伸ばした新聞の首脳者達が、テレビとの共存の道として補完性という新聞のメディア特性を選択したことは、納得のゆくところである。

とはいえ、これらの新聞のテレビ対抗のための編集方針には当然のことながらテレビに触発された紙面作りが盛り込まれており、写真、イラストの多用化、見やすい紙面作りのための各ページの概要掲載等の努力があったことを、首脳陣は告白しているのである。

4. 「活字ばなれ」の実態

こうして現状を概観するかぎり、活字メディアはテレビによりその存続を脅かされながらも、逆に触発される形でテレビに対抗しうる内容的変質を図ることにより、テレビとの共存を果たしているといえる。しかし一部の統計結果に見られるように、若年層の活字ばなれの兆候がないとはいえず、活字メディアの将来は楽観を許さない、という見方もなりたつ。

学者の中にも依然として悲観論にたつものもあり、たとえばムートは、テレビの受容は活字メディアのように精神的な貫徹力や持続力を必要としないので、テレビに慣れてしまえば、活字を読む努力をしなくなると言っている (Muth, 1984)。またフランツマンは、テレビが数年のうちに主導メディアに申し上ってきた事実を、活字メディアの将来と見合わせて、なお問題視している (Franzmann, 1978)。

テレビの活字メディアに対する影響を肯定的に見るのは、たとえばシュタインベルク (Steinberg, 1983) で、テレビの活字メディアに対する触発的機能を評価し、理由として、1. テレビは読書の最大の促進源であり、テレビを多く見れば、本も多く読みたくなる、2. 一般

に認められている読書とテレビ視聴の関係（テレビを見れば本を読まなくなる）は、あまり事実合致しない、3. 書物の真の敵はテレビではなく、文明に対する悲観論である、としている。

こうした議論はこのままでは平行線をたどることになるが、ムートの見解を少し注意深く検討すると、事態がやや明らかになってくる。実は活字離れでとくに問題になってくるジャンルは、難解なもの、教養的なもの、つまり重厚長編なテキストである。ムートはボリュームのある書物を読破するのに必要な貫徹力が、テレビ視聴に慣れた読書態度には欠如してゆくのであり、テレビではシーンが絶えず変化し、見る側には持続的な集中力を必要としないので、長編を読破する能力が弱められるのだと説明している。ゲーマッハー (Gehmacher, 1974) は、ドイツとオーストリアでは、長編・難解書の読者は減少しているのに対し、短編・安直書の読者は増大しているという観察結果を報告している。

先に述べたように、日本の読書傾向もほぼ同列にあり、テレビを見る感覚で読める出版物の激増現象は、書店の店頭を見れば一目瞭然である。コミック本がコーナーのかなり広いスペースを占めているのは当然のことながら、いわゆる活字ものも文庫、新書版が非常に多い。内容も手軽に、気楽に読めるものが多く、表現自体が非常に読み易くなっている。文体が論理的であるよりも感覚的なものになってきており、まさにテレビ感覚で読める書物なのである。もちろんその中であって専門書・学術書類は従来のスタイルを固持しているが、量的には非常に少ない。したがって本の発行部数が増えたといっても、その中味は変質しており、2節でも簡単に触れた通り安直に読める書物が圧倒的に多くなってきているのである。

雑誌のヴィジュアル化は書籍より一層進んでおり、オール・グラビア誌も多く、読む雑誌というよりは見る雑誌になっており、「Focus」のような写真週刊誌の登場はそれを象徴するものといってよい。新聞も一般的に映像化していることは前述の通りであるが、店頭売りの夕刊タブロイド紙やスポーツ紙はラジカルに映像化している。

こうしてみると活字メディアのジャンルは、論理的な表現を基調とする難解書と視覚的、感覚的に読める安直書（一般雑誌、新聞もこれに含めてよいだろう）に分けられなければならない。そして活字ばなれとは、当面は、一般的に活字に接触する人が減少しているということではなく、主として「硬い書籍」を読まなくなっている事実を指しているのだと認識してよく、親や教師が活字ばなれを嘆く場合、十分に意識してはいなくとも、この意味での活字ばなれを問題にしているのだということが分かってくる。

事実、「うちの子は本を読まない。」とか、「どうしたら子供が本を読むようになるでしょうか。」と親が言う場合、その本とは暗に古典的名著、文学作品、教養書の類いを想定しているのである。逆に子供たちがこうしたジャンルの本を読まなくなったかわりに、少なくとも雑誌

とか、興味のある内容の文庫本や新書本には比較的良好に接触しているのである。

ここで問題になってくるのは、それではなぜある子どもは「硬い書籍」を読むのに、ある子は読まないのかということである。考察の手掛りとして、手始めに受け手のメディア接触態様を探ってみたい。

5. 受け手の接触態様

活字とテレビに対する受け手の接触態様に関する古典的研究に、シュラムの行った子供のマス・メディア接触の調査がある (Schramm, 1961)。彼はサンプルとなった各々の子供の活字接触量とテレビ接触量を調べ、それに基づいて活字接触量が平均以上のものと平均以下のもの、テレビ接触量が平均以上のものと平均以下のものに分け、第1表のような4つのカテゴリーに組み分けた。

第1表

	活字に平均以上接触	活字に平均以下接触
テレビに平均以上接触	High Users Group	Fantasy Group
テレビに平均以下接触	Riality Group	Low Users Group

表に明らかなように、シュラムはテレビをよく見、活字にあまり接触しない子供たちを Fantasy Group と名づけ、空想志向的接触で特徴づけられるとし、対照的にテレビをあまり見ず、活字によく接触している子供たちを Riality Group と名づけ、その接触は現実志向的であるとしている。

この場合、空想志向的接触では、現実の問題を忘却し、情動に身をまかせ、気晴しができ、一時的ではあるが恐怖や不安が除去されて欲求が満され、楽しみが味わえ、受動性が強化されるのに対し、現実志向的接触では、現実の問題に直面することを恐れず、むしろ恐怖や不安を目覚めさせて、問題解決のために努力するようになり、活動性が強化されるということが指摘されている。

読書家と非読書家のパーソナリティーについては、グレーベンとシェーレがシュラムと類似した知見を明らかにしている (Groeben・Scheele, 1975)。それによると、多読であるということは、とくに外界に対する関心、現実から逃避することなしに、環境を自力で克服しようとする欲求と合致している。この事実をふまえて読書欲は外界に関心を向けた、現実に適応した問題の解決を図ろうとする、ものの見方を前提していると結論づけている。これに対し本を読まない人は、自主性を求める姿勢の明白な欠如、短期的で直接的な欲求 (享楽追求)、不確定性の許容不能で特徴づけられるが、こうした特性は全体としては、迎合的で受動的な現実処理

の指標であると述べている。

ただしグレーベンとシェーレが対照したのは、シュラムとは異なり、読書家と非読書家であり、読書家がテレビの非愛好家であるか否かは問われていない。実際には、メディア接触はかならずしも択一的ではなく、相乗的である場合がある。日本では池内等が一元性モデルを論証しているが（池田・岡崎，1955），彼等は実験において雑誌，新聞，ラジオの3つのメディアを選び，接触に要する努力の度合にしたがって，接触難易度を雑誌，新聞，ラジオの順とした。三者を比較してみると，雑誌をよく読む人は新聞とラジオにもよく接触し，雑誌を読まなくとも新聞をよく読む人はラジオもよく聴くという結果になり，メディア接触の一元性が実証されている。もっともこの研究はテレビ出現前に行われたもので，現時点にそのまま適用することには無理がある。

しかし接触に努力を要しないメディアの利用者が，より努力を要しないメディアにもよく接触するという行動パターンには普遍性があり，ケンダールとラザーズフェルドの唱えた All-or-none の法則は依然として妥当しているようだ。館戸が分析した「テレビ一辺倒型対分散型」という接触パターンも示唆しているように（館戸，1967），テレビをよく見る者が，他のメディアを利用するとはかぎらないが（たとえば Novic・Sandman, 1974），シュタインボーンが調査に基づいて指摘するように，よく本を読む子であっても，テレビもよく見るという場合も多く，一つのメディアに限定せず，広く多様なメディアを利用するのは，むしろ読書家である（Steinborn, 1979）。

印刷メディアに関しては，よく聞く親の苦情が，漫画ばかり見て，本を読まないということである。しかしこの場合も，漫画を読むから本を読まないという結論は短絡的である。たとえばある調査で，コミックを読む子ども達と読まない子ども達を比較したところ，コミックを読む子ども達の方が，本を多く読んでいたという結果が出ている（Frantsits, 1973）。

新聞については，本を読まぬ人は新聞をパラパラとしか目を通さないし，読む時間も短いのに対し，本をよく読む人の多くは新聞を読むのにも多くの時間をかけている，という報告もある（Gehmacher, 1974）。

こうした実情を見ると，ザクサーが述べているように，一方に様々なメディアを重複的に利用して，豊富で確実な情報を入手している受け手がおり，他方にはメディアをほとんど利用していないか，あるいはごく限られたメディア（多くの場合テレビ）しか利用していない消極的な受け手がいる，という事実が浮かび上ってくる（Saxer, 1975）。

しかも重複的なメディアの利用者とは，活字メディアの多用者，ことに硬い本の読者であり，難解で長編なものに取り組む意欲と能力をそなえた人達であり，こういう人達が同時に映像メディアの積極的な利用者でもあることが多いのである。

したがって現在はシュラムが問題にしたように、テレビを見て活字に接しない受け手と、活字に接するがテレビを見ない受け手とを対比させて、活字ばなれの現象を論ずるよりも、接触パターンを次の三つのカテゴリーに分けて考えたほうが、事実に適合すると思う。

① 主としてテレビやコミック、あるいはラジオにしか接触しない。② ①の視聴覚メディアと柔らかい活字メディア（一般雑誌、大衆新聞、軽い読み物）に接触する。③ ①、②の他に硬い書物（専門書、学術書、教養書等）にも接触する。

この分類にしたがえば、これまで触れてきた活字ばなれ現象は、二つの傾向に分けて考えることができる。いわゆる柔らかい活字メディアにも接触しない、「広義の活字ばなれ」と、硬い活字メディアに接触しない「狭義の活字ばなれ」であり、前述の通り、日本では当面、狭義の活字ばなれが不安の種になっているのだということができる。

6. 活字文化の意義

しかし、日本においても広義の活字ばなれ現象が起こるかも知れないという兆候は皆無ではない。事実、アメリカやヨーロッパでは、いわゆるリテラシーの低下という、高度な文明社会では考えられないような現象が既に生じており、西ドイツでは少なくとも100万人の十分に読み書きのできない人がいるというデータもある。読み書きできぬ原因は、学校で習得できなかった場合もあれば、一度は習い覚えたがその後忘れてしまった場合もあり、メディア情報はテレビその他の視聴覚メディアに頼るしかない。

これに対しては、テレビの普及した現代社会では、なにも活字メディアを利用できなくとも、必要な情報は得られるし、視聴覚情報の方が優れた面を多くもっているのであるから、なにも活字メディアに依存する必要はないという、活字メディア不用論もでてくる。

しかし「活字ばなれ」を肯定する意見は一般的にはそこまでラジカルではなく、活字メディアの相対的な退潮を認めるものである。すなわち、活字メディアを利用するだけではなく、視聴覚メディアもあわせて利用することによって、人間の知覚能力を存分に発揮した情報収集活動ができるようではないかという考えである。読書率が多少減るぐらいのことは大目に見てよいということにもなる。ただし忘れてならないことは、映像メディアの世界そのものが、根底では活字文化、端的には文字文化に支えられているということである。たとえばヘフナーは、活字メディアが映像メディアに代替されることを、かならずしも否定的な発展であるとは考えていないが、映像メディアそのものが、識字能力に支えられている点を強調している。たしかに印刷物がディスプレイ表示に代るかも知れないが、その場合の主役は依然として文字である(Haefner, 1985)。しかしテレビ放送は文字を読み書きできなくとも大抵理解できる。だがテレビの映像の製作にタッチするスペシャリスト達は文字メディアの達人達であり、彼等の入社

条件の一つが活字解読能力であり、その能力なくしては、自分達の仕事を完璧に遂行することができないということも忘れてはならないだろう。つまり映像ジャーナリストに限らず、多種多様な知的専門職には、いわゆる硬い本を読みこなす能力が要求されているのであり、狭義の活字ばなれが進行すれば、文化の基盤が脅かされかねないのである。

日本の親の心配が、まさに狭義の活字ばなれなのだということは先に触れた通りだが、それが出版される書籍の内容から推定できるだけではなく、学生の学力という面からも肯定せざるを得ない。アメリカの大学では既に大分前から読書力向上コース (remedial course) が新入生のためにもうけられているし (Jacoby, 1978)、ドイツではアーヘン大学が学生のためにドイツ語基礎講座の開設を考えているというニュースがある (Fritz·Suess, 1986)。日本でもリテラシーそのものが問題になることはないが、狭義の活字ばなれは大学教育の支障になりつつあり、大学生の専門書を読む能力が低下してきているという現場の声をよく聞かし、大学によっては、教養書や文芸書をテキストにして読書ゼミを開設しているところもある。

対策として大学教育においても、学生の活字メディア解読力の低下を補うために、AV 教授法をもっと広範に導入すべきだとの意見もあるが、全面的には賛成できない。テキストの理解力に関するデンボウの研究などは、その証左になると思う (Denbow, 1975)。デンボウによれば、テキストの内容が易しい場合、聞きとりによる理解力は、読みとりによる理解力と同等かまたは優れており、聞きとりの理解力の方が劣るということはない。しかし、テキストが難解である場合は、読みとりの理解力が聞きとりの理解力と同等か、または聞きとりの理解力よりも優れているのである。

クロルは、印刷メディアと比較した口頭メディアないしは視聴覚メディアの教育的効果を調査した。その際、読むことの苦手な学習者も、場合によっては聞くことによって、難解な内容のテキストもよく理解できることがあるという仮説を立てた。つまり読書力というのは通常は「読み方」の教育をどの程度受けたかに左右されるが、聞く能力は生まれつきのもので、特別な訓練は必要がないという理由である。結果は、優れた読書力を身につけた学生は聞きとりによっても、読みとりによるのと同じようによく学習することができたのに対し、よく読めない学生は視聴覚のメソッドを用いても、読書によるのと同様にあまり学習できなかった。クロルは、この結果に基づいて、非力な読み手は優れた聞き手ではなかったし、非力な聞き手は優れた読み手ではなかったと結論づけている (Kroll, 1974)。つまり優れた読み手というものは、非力な読み手よりも、いかなる情報メディアに対しても優れた受容力を持ち、より多く学習する能力をもっているという推定が成り立つのである。

読書にはトレーニングを必要とするが、視聴覚メディアにはその必要がないという常識論はどうやら妥当せず、大学教育のような知的労働には、たとえ視聴覚メディアを導入するとして

も、それはあくまで補助手段であり、基礎的な読書力の向上が不可欠であるといわねばならない。

7. 活字メディアの復権のために

最後に、活字ばなれ、とくに狭義の活字ばなれに対する対策を考えてみたいと思うが、まず、日本以上に事情が深刻であると思える欧米の学者の意見に耳を傾けてみよう。

読書力育成の最も重要な要因の一つとしてはモチベーションが指摘されているが、児童の場合、家庭環境がモチベーションを助長すると考える学者がいる。フランツマンは、両親自身が読書家であり、日常生活において本との触れ合いが家族の者にとって自明のことであれば、子供にとって、読書への意欲の基礎がすでにととのえられていることになる」と述べている。子供が字を読めないうちから、本を読みたいという欲求をもつのは、両親の本好きを自分の模範とするからであろう。これに対しメーベスは、子供の両親を模倣したという態度だけでは不十分で、将来の読書に対する興味に積極的な影響を及ぼすものは、忍耐、根気、辛抱、貫徹心等の性格であり、このような性格は子供のうちに養っておかなければならないと考える (Meves, 1975)。

ただしヨーロッパのような、階層が明確に分化している社会では、こうしたモチベーションを獲得するためには、中流以上の子供が非常に有利な立場にあるということは否定できない。アメリカでも似たような事情があり、黒人の労働者階級を調査したハースは、精神的に正常な個人の識字能力は、その人の家庭、共同体、職場における識字能力に応じた役割演技に負うところが多いと述べ、労働者階層でモチベーションを獲得することがむずかしいことを明らかにしている (Heath, 1980)。

この点にもう少し詳しく立ち入るならば、たとえば西ドイツでは、就学前に字を読める児童はきわめて少ないが、良い家庭の子供は字が読めなくとも、読書へのモチベーションを備えている上に、話し言葉の徹底的訓練を受けている。それは論理性のある言語で、知的作業の前提となる言葉遣いであり、学校教育で用いられる言語に通じている。これに対し労働者階級の子供は総じて、このような言語訓練を受けていないために、学校で使われる言葉にとまどいを感じ、学習能力の上での大きなハンディーとなる。さらに、家庭で読書へのモチベーションを育てられなかったこれ等の子供たちが、学校でそれを獲得することは大変むずかしい場合が多いといえる。

それはともあれ、児童期に身につけたモチベーションが年令にしたがって発達してゆかなければ、大きくなって読書に対する興味を失うことは多々あることである。グラフは人生には「文芸的思春期」(literarische Pubertät) があり、その時期に、これまでの殻を破って本に対する

新しい魅力を見つけた人が、その後も多読家になりうると述べているが (Graf, 1980), 示唆的な考えである。

以上に述べた欧米での論議は、日本とは事情が異なるので、そのまま当てはまるとは思えないが、参考にしながら日本における対処を検討してみることにする。まず児童期におけるモチベーションの覚醒だが、教育ママの多い日本では、この点に関する親の関心の高さはいうまでもない。しかし、両親が自ら読書家で子供の模範となるというよりは、「本を読みなさい」的な強制の方が強いのではあるまいか。もちろん読み聞かせなどをしている親も多く、これは一方策であろう。ただし読書には、読み出した本を最後まで読み切るという、努力や忍耐が必要であって、メーベスのいう耐久精神の育成も欠かせないのではなかろうか。

他方、日本では就学前の児童の階層的な言語能力の差は、ヨーロッパのように顕著ではないので、読み書き訓練の障害は存在しない。義務教育に耐えられる能力を備えた人であれば、成人してから日常生活の上で必要な読書力にこと欠く人は少ないといえる。

ただ就学期の読書へのモチベーションということになると、日本の教育の実情は問題をはらんでいる。ほとんどの子供が受験戦争の渦中に巻き込まれているから、義務づけられた学業の消化に追われ、自由時間がなく、ストレスを感じている。マス・メディアの接触は、小間切れにされた、断片的な時間に、息抜きとして利用される傾向が強いため、いきおい娯楽志向のテレビ番組、コミック、雑誌、気楽な単行本ということになってしまう。結局、受け手の知覚は映像メディア志向的になってゆくから、ますます硬い本を読もうとする意欲を失い、読みこなす力も育たない。

こうして高校生までの就学期間には、長編の文学書や自分に興味のある教養書を読む時間を作り出すことは、よほど関心が強くないと不可能に近く、多くの学生が、一般的な読書力はあるものの、硬い本を読みこなすだけの実力を身につけていない。

グラフのいう文芸思春期も無視されてしまうような生活リズムになっているわけだが、大学で専門書を読む力が足りないというつけがまわってくる。その意味では、本気で大学で勉強しようと思うならば、自分の関心のおもむくがままに、自発的に専門書や教養書を読んでみる必要があるし、それだけの読書力を学業そのものでも求められているのであるから、大学においてこそ、遅すぎた文芸思春期を体験すべきではないだろうか。

大学の教授側も、安易に視聴覚教育に迎合することなく、学生を硬い書物にチャレンジさせるよう指導してゆくべきであろう。

引用・参考文献

Denbow, C. J., 1975: Listenability and Readability. An experimental investigation. In: Journalism

- Quarterly, Vol. 52/Summer 1975.
- Frantsits, A., 1973: Der Commics-Konsum 10-bis 11 Jähriger, ihr Leseverhalten und ihre sprachlichen Leistungen. Eine empirische Untersuchung, Diss. Graz.
- Franzmann, B., 1978: Plädoyer für Buch und Lesen. Zur gesellschaftspolitischen Begründung der Leseförderung. In: Deutsche Lesegesellschaft e. v. (Hrsg.): Plädoyer für Buch und Lesen, Bonn.
- Fritz, A./Sues, A., 1986: Lesen. Die Bedeutung der Kulturtechnik Lesen für den gesellschaftlichen Kommunikationsprozeß, Konstanz.
- Gehmacher, E. u. a., 1974: Buch und Leser in Österreich. Eine Untersuchung des Instituts für empirische Sozialforschung, Wien/Hamburg.
- Graf, W., 1980: Literarische Pubertät. Überlegungen zu Interviews mit erwachsenen Lesern. In: Der Deutschunterricht, Jg. 1980, Nr. 5.
- Groeben, N./Scheele, B., 1975: Zur Psychologie des Nicht-Lesens. In: Göpfert, H. G. u. a., Lesen und Leben, Frankfurt/Main.
- Haefner, K., 1985: Lesen im Computerzeitalten. Anachronismus: Das Klammern aus Papier? In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel, Jg. 1985/Heft 34.
- Heath, S. B., 1980: The Functions and Uses of Literacy. In: Journal of Communication, Winter 1980.
- Kroll, H. M., 1974: The relative effectiveness of written and individualized audio instruction in the intermediate grades, In: AV Communication Review, 1974/No. 3.
- Meves, C., 1975: Lesen und Familie. In: Göpfert, H. G. u. a., (Hrsg.), Lesen und Leben, Frankfurt/Main.
- Muth, L., 1984: Buchpolitik als Sozialpolitik. In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel, Jg. 1984/Heft 38.
- Noelle-Neumann, E., 1986: Die Antwort der Zeitung auf das Fernsehen. Geschichte einer Herausforderung, Konstanz.
- Novic, K./Sandman, P. M., 1974: How Use of Mass Media Affects Views on Solutions to Environmental Problems. In: Journalism Quarterly, Vol. 51/Autumn 1974.
- Saxer, U., 1975: Das Buch in der Medien-Konkurrenz. In: Göpfert, H. G. u. a. (Hrsg.): Lesen und Leben, Frankfurt/Main.
- Schramm, W./Lyle, J./Parker, E. B., 1961: Television in the Lives of our Children, Stanford Univ. Press.
- Steinberg, H., 1983: Reading and TV Viewing-Complementary Activities. In: Journal of Reading, 26. 1983/Heft 6.
- Steinborn, P., 1979: Kommunikationsverhalten und Buch. Teil II. In: Bertelsman Briefe, Heft 97, 1979.
- 阿久津喜弘, 1977「受け手の構造」『マス・コミュニケーション』山根常雄他編, 有斐閣.
- 館戸 弘, 1967「マスコミュニケーション接触行動の要因分析」『東京大学新聞学研究所紀要』15.
- 池内 一・岡崎恵子, 1955「コミュニケーション研究覚之書」『東京大学新聞学研究所紀要』4.
- 広瀬英彦, 1984「出版と大衆文化」「新聞の変質」「映像化する活字メディア」『マス・コミュニケーション論Ⅱ・大衆文化とマス・メディア』佐藤智雄編, 放送大学教育振興会.
- M. マクルーハン, 1988『メディア論』(栗原 裕・河本伸聖訳), みすず書房.
- 水野博介, 1988「コミュニケーションの効果と機能」『コミュニケーション論』林進編.